

修辞学への郷愁

原 子 朗

— 文学と文体論 —

「修辞学」というと、どんな学問だか中味を知らないひとにも、名前を聞いただけで、ひどく古めかしい感じを与えるようです。世界的に見ると、たしかに古めかしいギリシャ文明の開花期からの伝統をもつ学問だから仕方ないけれども、とにかく何代前かのおじいさんの使っていた、抽出しのやたらと多い、いかめしい金具のついたタンスかなんぞの感じを与えるらしい。もっとも、高校出たての女子学生がシュウジガクと聞いて、お習字のガクモンのことかと思ったという、そんな例もあります。要するに現代人の生活とは、それはまるで無縁のもの……ということになりましょか。

また、ものの本にも「解体した修辞学」とか、「衰亡した修辞学」とか、「旧修辞学は破産した」などと書いてある。もうカタなしです。まるで幽霊でも出てきそうな感じですよ。

いうまでもなく「修辞学」というのは日本語であって、明治時代になって英語のレトリックの訳語に困って、そう名づけたものですよ。ほんとに困ったかどうか現場にいたわけではありませんが、

これはよくわかりませんが、ベースボールを野球と（これは正岡子規が明治二十六年にそういいかえたのがはじまりだそうですね、これは子規ではなさそうだがグラウンドのことを保健場、ホケンジヨではなくてホケンジヨウです）訳したみたいなものでしょう。野球だって保健場だって字をみつめてみると、やはり古めかしい、なにをオレだけバカにして……と旧修辞学がいいそうですが、やはり日常よく使われる語は、古めかしさをそう感じさせないのですね——

ところで訳語に苦心して中国の「易経」という本の中から借りてきたこの修辞学の、本家であるヨーロッパでも、レトリックはどうやら骨董品扱いに近いようです。その証拠にはイギリスでもいちばん伝統を重んじるオックスフォードやケムブリッジの大学でも、このレトリックという学科を廃止してしまいました。もっとも廃止してからももう百年ちかくたつわけですが、なにしろ大事な中心学科だったのが追放の憂き目にあったのだから、よくよくのことです。レトリックは日本ではなら作文の時間みたにして、イギリスでは中学あ

たりにはまだ残っていますが、あまり人気はないようです。フランスでもレトリックがリセ（日本の高校くらい）で授業が行われているのを私もみましたが、ここでもいたって不人気のようにでした。そんなわけで骨董品扱いは日本だけでなく、これは世界的な事情といつてよいでしょう。

そんな修辭学をわざわざ取上げて、しかも「修辭学への郷愁」などという、私はよほどの老いぼれか、物好きみにたい思われるかもしれません。まして、「文章やはなしの類型的な規範でしかなくなくなった修辭学に、とってかわった新しい文体論……」などと、私じしんがこれまででなんどか書いていたりしているのですから、少し、しるめたい気もします。しかし、どうか誤解のないように願いたい。私は衰亡した軍国主義かなんぞを、も一度復活させるみたいに、修辭学をまるごと甦えらせようなどと、そんな危険な考えをもっているのではないのですから。では活かせる部分もあるからそこだけでも復活させようというでもないのです（それも少しあるにはあるが）。では何か、ということになります。ひとことではちょっといいにくい。それがうまくこれからお話することで結論的に出てくるかどうか、自信はありませんが、まあお聞き願いたいと思うわけです。

「言語とは何か」とか、「文体とは何か」といったことばの本質論みたいなものが、今さらのように専門家の間でも賑やかに問題にされていて、一般にことばへの関心は最近とみに高まってきた感があります。さっきからいっている修辭学にとっては皮肉みみたいな現象です。最近といっても、大きくは日本の敗戦後の特徴的な機運の

一つなのですが、ここにここ十年ぐらいの大きな傾向といえましよう。たとえば一般のことばへの関心を反映するかのようには、言語学も少なくともはた目には、かなりの賑わいを見せています。

言語への関心の高まりは、マスコミ・メディアの異常な発達と普及を例に出すまでもなく、私たちがおそれるべき情報化時代の中にいるということ、その渦の中でみんなが一種の危機感におそわれているということ、そうした危機感がいきおい言語への関心を高めていく。しかも、そもそも本質論から考えなおしてみよう、出発点から出直してみよう、というところに来ているのだ、といえるのではないかと思えます。危機感というが大袈裟みたいですが、大学さわぎ一つ取上げてみても、原因も結果も、結果というのはこれからどういうふうに望ましい状態に收拾されていくかということですが、すべて私たちのことばの問題に帰着するといってもよろしい。よく「断絶の時代」などと、今さらのように古いことばが流行していますが、これにしても私たちの社会を成り立たせている言語の問題でしょう。言語（情報）の氾濫・過剰→言語（情報）の質的薄まり→言語（情報）不信→氾濫・過剰……という堂々めぐりの悪循環もあってきて、言語に対応する事物や経験はいっこうに増殖せず、不安定で、言語とは相対的に卑小化する。ということは言語（情報）だけが化物のようにふくれ上って、ナマのまま私たちを取りまき、おびやかしたり、くすぐったりしては、次から次へ消えていく。まあ、漫画ふうにいえばそういうことになります。そのため話を通じ合わないといつてノイローゼみたいになっているのが危機感だ、といえるかもしれません。

こんな時代に、ことばの芸術とされている文学が現れて、銀えられたほんものことば、実体のあることばで、子ども落ちつけ、化物や幽霊どもは消えてなくなれ、と実力を発揮してくれると有難いのですが、それでこそ文学といえるのかも知れませんが、現実はまだなにかそうはいきません。文学まで火事場の騒ぎに巻きこまれて、一緒になって危機感をあおっている、というのが実情のようです。現代文学が時代的な、あるいは個人的なスタイル(文体・様式)を喪失して、かるがるしく浮遊している、通俗的で風俗的なエロ・グロ・ナンセンスだったり、やたらと観念的でおしゃべりな、ひとりよがりの詩や小説が洪水のように大量生産されている、つまり文学もまた危機の中にある、というわけです。まじめな文学者は、現代という時代くらい捕えにくいものはない、もう小説などでは現代の人間の内面を描くことはできないのではないか、マゲモノ(時代小説)でも書くより、しようがないんじゃないか……と悩んでいます。まったく今どきの小説など、過剰ゆえに貧困という文学の逆説的な状況をみずから作り出すために、作家はせつせと書いているのではないかと思いたくなるくらい、どれも似たような出来ばえです。魂をゆすぶられるような作品などというのは、もう昔の夢かと思われまます。ところがまじめな作家たちは、さすがに文学者だけあって、デカダンにおちいらずに、やはり根源的なところまでさかのぼって、文学の言語とは何か、文学を成り立たせる文体とは何か、方法とは……と、改めてみずからを問いたたそうとしています。

まじめな詩人や作家たちがそうやって悩んでいるとするなら、その作品の享受者であるまじめな読者は読者で悩んでいる。なかば絶

望したり、うんざりしたりしながらも、まだ一縷の望みを失わずに、けなげにも、自分の読み方が間違っているのではあるまいか、文学に妙に期待をかけすぎてたのではあるまいか……といったふうな反省までするわけです。たとえ詩や小説のことばを、宝石か神様ののご託宣かなんぞのように有難がったのは、もう昔のことで、自分たち読者も成長し、作者と同じくらいことば数もふえ、批評眼もそなわった今は、文学作品のことばがやくたいもないおしゃべりに聞こえたり、つぶやきだったり、単なる報告のそれだったりするのも当然なのではあるまいか……というふうに考えたりする。そういうところに、いわゆる文学変質説などが出てきたり、また英文学者の外山滋比古さんのいわれるような、読者の質の向上を考える近代読者論などが出てくることになるのだと思います。

スペインの哲学者オルテガ・イ・ガセットは、すでに一九二五年に彼が書いた「芸術の非人間化」という論文の中で、「現代芸術の数々の奇行は、芸術の重大性を放棄するという一事に要約される」といい、「芸術はかつては科学や政治と同様に、人間の活動と関心の体系における中心——われわれの人格・情熱——にきわめて近いところを回転していたのだが、今やそれは外側の軌道へと移動したのである。芸術は本来の性属を完全に保有しながらも、緊要な営為ではなくなったのである。」(川口正秋氏訳「芸術の非人間化」より)といっています。このオルテガ氏の現代芸術診断は、ちょうど同じころ『芸術の運命』という本を書いて、ロマンチズムいらいの現代ヨーロッパ文学の救いがたい病氣、病患を、するどく批判したロシアの亡命哲学者、ウラジミール・ウエイドレ氏の考えと対応して

いておもしろいのですが、ウェイドレ氏が現代文学がごとごとくスタイル（文体・様式）を喪失して、崩壊の危機にあることを深刻に警告するのに対して、オルテガ氏は「芸術はふたたび森の入口で仔山羊たちを跳びはねさせる偉大な牧神の魔笛を象徴とするにふさわしいものとなった。」というように、ここにはむしろ自由な古代への復帰を暗に指向する、現代芸術の若さの可能性の肯定という、一種の楽天的な展望があるように思われます。

話が少し廻りくどくなりましたが、現代文学の一種猥雑な氾濫を、文学崩壊の危機的現象とみるか、かえて新しい可能性への発展過程とみるか、そのどちらの立場に立つにせよ、現代文学はすでに変質期・変貌期にはいって久しいということは、世界的な客観情勢としてみとめざるをえないようです。オルテガ氏のように、文学本来の属性はそのまま保有し、伝統的な形式は受けつぎながらも。

では、そういう認識ができたからといって、私が力説(?)してきた言語の危機感がなくなるかという、そうはいかない。いくら名医たちが抽象的な診断書を書いてくれても、では目下のわれわれはどうしたらいいんだ、という不安は依然として残るわけです。たしかにこうした文学ないし文学における言語の変質の認識をもつことも有益で大事なことであります。文学が天の高みから聞こえる美の女神の歌声であったり、人間のドラマを見ぬいた達人の語る物語であった時代は、たしかに終わったのですから。私たちはドラ声で叫んだり、うめいたりする私たちの歌、みんなの歌に文学を感じ、隣人の喧嘩や自分じしんの劇として小説や芝居を実感しているの

すから。ともかく抽象的な診断であれ、そうした世界的な遠望をもつことは、足もとの現実をみつめる、つまり近顧することに直接大きな作用をしますから、ほんとに大事なことです。しかし、やはりもっと大事なことは、その足もとのことです。言語のはたらきに危機を実感しているのだったら、世界の言語一般の認識よりも日本語の現実を、日本という現実の中でどう処理していくか、ということでしょう。日本の文学をみんなでどうつくり、そのためにはこれまでの日本の文学作品を、たとえば古典までも、改めてどう受けとめなおしていくか、ということが私たちの今日の問題でなければ、どうにもなりません。

ここで田中克彦という方の「戦後日本における言語学の状況」という論文が目にとまりました（文学、'88年・9月号）。田中氏は題の示すとおり、日本の現代言語学のあり方をいろいろ反省しておられるわけですが、その中で二人のひとの言語学批判の一部が引用してあります。それをここで孫引きで紹介してみようと思います。田中さんには失礼ですが、そのことで田中さんの論文がおおよそどんな内容のものか（ここでそれを紹介している余裕がないので）、御想像願いたいと思います。

「言語とは何かを問うとき、わたしたちは言語学をふまえたうえで、はるかにとおくまで行きたいという願いをもっている。言語の解剖理論が最終的ではなく、たんなるはじまりであり、言語の表現理論が最終的であるばあい、この欲求はやみがたいものである。そこでわたしたちは言語学者が終ったところからはじまり、言語学者は、わたしたちが終ったところからはじまると

いう關係が成立つたろう。」(吉本隆明「言語にとって美とは何か」)

「今日までの言語学の言語観は文学としての言語をとらえるには丈が足りない。しかし今日までの言語学が文学にとって無力であるということは、それが文学の分野においてのみ無力であるということにとどまらない。それはすなわち言語学が言語そのものの本質をとらえていないということだ。」(杉山康彦「言語と文学」)

両者とも現代言語学への手きびしい批判であるわけです(吉本氏のは学問と詩や評論の實際活動との關係をいっているみたいですが、やはり言語学の物足りなさへの皮肉をこめた批判にもなっています)。そして両方に共通していることは、ともに文学の立場からの批判ということです。実はこの私じしんも、言語学に対してこのお二人とまったく同じ不満と批判を持っている者です。しかし、文学の立場からでしたら、言語学よりも、もっと文学作品における言語のはたらしきを文章や文脈に即して具体的に研究している文体論という研究がある。ではこのお二人も、言語学に対しては不満を洩らしても文体論に対しては批判的でないかという、私の推察するところ、どうもそうではなさそうです。なぜなら、少なくともこれまでのところ、文体論の研究は(いろいろな立場があるとはいえ)、おむね言語学におぶさって来た、というと語弊がありますが、言語学の立場からの研究が、世界的にみても多かったですし、今も多い、ということがいえます。はっきり、文体論を言語学の従属学科として考えるひともあるわけです。そんな例になるかどうかわかりません

が、ごく最近の文体論の研究書として、ここに桑門俊成という方の『国語文体論の方法』という本があります。桑門氏は言語表現を、言語学というラングとパロールの往復關係にあるものとしてとらえ、「文体研究はこの往復の上に行なわれることになる」といっています。標題も「国語文体論」とわざわざ「国語」を上につけて(私などにはなくも)が、なと思われるのですが)おられるくらいだから当然かもわかりませんが、ソシュールの言語理論を決定的な出発点としているわけです。そして氏はつぎのようにもいっています。「どのような定義をしようとも、文体論も言語研究の一部であることに異論をさしはさみ、これが文学研究の一部であると言う人はいないだろう。」(同書33ページ)

ついでにいうと、これは少しいすぎです。桑門氏が自分の文体論を言語研究の一部と限定するのは自由ですが、みんなそうかどうかは困ります。私など大いに異論があります。私は文体論を文学研究の一部どころか、窮極の中心領域だと信じているくらいですから。まあ、それはともかくとして、言語学に対して不満や批判をもち、ことに言語学的文体論に対して、はっきり否定的な態度を示すひとも少なくありません。これは研究者の立場のちがいでだけいってすまされない、もっと大事な理由があつての否定や批判ではないか、と私は考えているわけです。なぜなら、研究者の立場のちがいで、言語学や言語学的文体論をそんなに否定したりできるはずはありません。いくら文学作品が相手とはいえ、おなじ言語のはたらしきを追求していくわけですから、好むと好まないにかかわらず

ず、言語学のお世話にならないですむわけではないのです。どんな研究も、隣接科学や類縁する諸研究の助けなしにはありえないことにち、文体論の研究にしても心理学や生理学、風土学や地理学までもの助けが絶対必要です。ことに言語学に対しては足を向けて寝ることもできないのです。

では、立場のちがいがからではないもっと大事な理由とはなにか、それは私のこの「修辞学への郷愁」という話ぜんたいの結論みたいなものといってもよいわけですから、ここでは申しませんが、研究者の間でばかりでなしに、いかなれば文体の実践者といってもよい作家や評論家の間でも、言語学や文体論の研究といったものは、概して不評判のようです。そんなものは読んだこともないという、言語や文体に対しては人一倍うるさい山本健吉氏のようなひとまいます。せんだって東京新聞が四人の作家（中村真一郎、安岡章太郎、野間宏、大江健三郎）に、それぞれの文体についての考えを書いてもらい、それを連載していました。[※]べつに、四人の作家が言語学や文体論をくさしていたというわけではありません。現代作家たちが文体というものをどう考えているかがわかって、私には興味があつたのでここで取上げるわけですが、とても全部には触れられませんから、注目すべき論点だけをいくつか拾って紹介してみます。

文学は大きく質的变化を見せつつあり（これは野間宏氏の発言ですが）、「文体否定が世界の文学の大きい目標の一コとして考えられる必要があると考えるが」、そのためには「文体の成立する根元にあるものについて十分検討」して進むべきで、その検討はこれまでの修辞学では不可能である。「これまでの修辞学は、決して言葉そ

のものが隣接する領域として密接な関係をもつ心理、生理、また政治について見とどけることがなく、またそれかといって言葉そのものの追求も、さらにまた言葉と想像力及び知覚などとの関係も見ることがなく、修辞学はすでに多くの文学者に見放され、手ばなされてしまっている」という野間氏は、「文体の成立する根元はこの想像力と知覚が言葉の間においてつくりだす、一つの特別な時間、空間にある」といってから、現在サルトルその他の人々によって大きく前進させられているエクリチュール（文章体、書法）の追求も、その追求によるだけでは「ついに文学の根元に動いているものがないのであるかを、十分引出して来ることは、むずかしいのではないか」といっています。そして作家や詩人が、ペンやタイプや「その身体を使って作品を書くという行為をば中心に据えて、文学を考えるとということがなければ、現在すすめられているエクリチュールの追求も、むしろ文学の根元を離れる」ともいっています。この野間氏のいう「文体否定」という意味は、中村真一郎氏のいう「絶えず文体の固定化をきらって、ある言い回しを破壊しながら進まなくてはならない」という自覚に通じるわけですが、中村氏も「文体こそが文学として第一の資格」と考える反面、文体を意識すると想像力が展開しないという矛盾を経験的に述べ、両者の「緊張ある対立」も実作の場合邪魔で、「この美学的意見は出来上ったものを裁く時にしか役に立たない」ともいっています。

この作家たちの意見の中では、既往の言語学や文体論が直接批判されてはいないにしても、野間氏のいう修辞学や、エクリチュールの研究は広い意味での文体論であり、それならばはつきり批判され

ています。また中村氏のいう「美学的意見」も、つまりは文体論のことで、それは人の作品を読むときしか役に立たないといっているわけです。

どうやら、最初にいった修辞学がここで再登場するきっかけをうかんだようです。ご覧のとおり、野間宏さんにも修辞学なるものももうどうにもならない、見放された骨董品らしいです。

では、ほんとうにそうなのか。野間さんはじめ、おおかたの共通する考えをここで疑ってみるというのでなしに、もう少し別の考え方もできるのではないかと私は思うわけです。ずっと私も修辞学を骨董品扱いにしたきたので、こちらで少し罪ほろぼしをしてみようというわけですが、なにしろ修辞学には掛値なしに二千年もの歴史があるわけです。ひと口に旧修辞学とか、これまでの修辞学は……などと私たちはいうわけですが、そのとき二千年余の歴史を頭に思いうかべていっているわけではないと思います。まして弁論術いらいの古代ギリシャ・ローマの修辞学を考えてなどいえないと思います。ただか修辞学が斜陽を浴びはじめたヨーロッパでは十八世紀以降の、日本でなら昭和の十年前後までのそれを頭に置いていっているのではないのでしょうか。日本での修辞学の訳語のことなど最初に少し申しましたが、西洋のレトリックを移植して日本の修辞学としての基礎づくりをしたものに高田早苗の「美辞学」(明22)、坪内逍遙の論文「美辞論稿」(明26)、島村抱月の名著「新美辞学」(明35)、五十嵐力の「新文章講話」(明42)——『文章講話』(明38)の増補版——などがあります。西洋修辞学の翻訳紹介程度のものなら逍遙の『小説神髓』の文体論に影響を与えた菊池大麓の「修辞及華文」(明12)

をはじめ、今村長善「文章哲学」(明22)とか、鶴田久作「修辞論」とか、大和田建樹「修辞学」(明26)とか、武島羽衣の「修辞学」(明31)とか、佐々政一「修辞法」(明34)とか、他にもまだありますが、なんといっても前にあげた高田早苗、逍遙、抱月、五十嵐力の功績は、輸入間もない修辞学を自己のものとし、日本のものとして樹立したという点で大きいものがあります。

しかしこの四人の仕事だけを見てもいえることは、心理学を取入れて、みずからも近代的な文章家として実践的であった五十嵐力の修辞学を一応別として(五十嵐修辞学は今でも生かせる創見にみちています)、高田、坪内、島村の修辞学、いや「美辞学」は、いずれも美学的です。一言でいってしまうなら日本の修辞学(伝統的な漢学・国学系の修辞論は別として)の美学的偏向の基礎を作ってしまったといえるでしょう。前にいった文体論の言語学的偏向と同じく、この美学的偏向ということは、日本の修辞学から文体論を考える時の大きな契機、問題点といえましょう。これは明治後半期の美学隆盛の風潮(文学者でいえば鴎外を思い出せばよい)の刺激があったからですが、とにかくよくも悪くも美学的でした。こまかい説明はここではできませんが、ヨーロッパの修辞学の幅ひろい伝統を美学的立場で移植樹立したということは、集中的でもあったかわりに、それだけ狭めてしまったということにもなります。島村抱月も『新美辞学』の中で、「吾人の見るところを以てするときは、修辞学は純然たる科学として、美学の一部を成すべきものなり」といっています。もっと実際の、みずからも実践的であった五十嵐修辞学の幅のひろさ、新しさはそれだけに光ってくるわけですが、そ

の後日本の修辭學も明治期ほど熱を帯びては振わず（それはヨーロッパのそれがすでに斜陽期にあつたことも誘因なわけですが）、とうとうそれは、それこそ文章の一般的・類型的な規準や規範を示すものぐらゐに考えられ、魅力を失ひ、古びて来たた、簡単にいへばいえるでしょう。そして文体論が修辭學にかわつて、こんどは個々の作品に即して、その作品や作家の独自のスタイル（様式・作風）を具體的に、言語事實によつて見ていこう、というふうになつてきたわけですが。これとても欧米のスタイリスティクスの輸入であるわけですが――。

ヨーロッパ修辭學の衰退を決定的にしたのは、それが文体論や、芸批評にとつてかわられていくのでもわかるように、活字文化、印刷文化の世界的な波であつたわけですが。もともと、修辭學は話體論や話芸批評ともいえるものだつたわけですから。（そういう意味では話しことばが大事にされてきた現代に、修辭學の復活するチャンスはいくらもあるといえます。）しかし、そうした機械文明による現象的な直接誘因とは別に、より本質的な、自壞作用を促進する内部要因ともいえるものを、修辭學じたいが孕みつつけてきていた、と私は考えます。それはごく単純化していうと、もともと技術であり実践的な理論であつた修辭學が、しだいに實際を離れたものになり、ついには「科學」になつていったという一事です。その傾向は紀元前のギリシヤ時代からローマ時代にかけて、つまり弁論術らしいの古代修辭學の理論をまとめたアリストテレスから、約二世紀遅れてその理論の實踐者でもあつたローマのキケロ（『雄弁術』）その他の著書は後世ラテン散文の規範とされた実践家（のころまでの、

後の修辭學にくらべると遙かに行為的實際的だつた時代に、すでに孕んでいた内部要因だつたともいえます。どうやら人間の經驗的知恵というものは、時代とともに理論化され、その理論が精緻になつてくるにつれて、最初の經驗そのものだつたころのヴァイタルな、未分化ではあるが適応力をもつた「初心」というものを失つてくるのではないのでしょうか。そういう陥し穴は、すでにその初心のころに同時に用意されているようです。

理論というものは、理論が理論を生んで（現実を媒介とせず）に細緻化され、分化し専門化していく傾向性をもつています。すると各種の偏向（美学的それや、言語学的、心理学的それ、など）は必至です。だがそれは人間の歴史の必然というか、科學の宿命みたいなもので、当然といえます。さからえないことです。しかし、最も大切なものは、偏向うんぬんよりも修辭學そのものの生きた力、つまりヴァイタリティみたいなものです。ことばと生活を分離させず（科學は思はず分離させているものです）、常にことばを人間そのものとしてとらえていく主体的な行為性、これをなくしたらおしまいです。衰亡、解体、破産も当然です。理論は形骸でしかないわけです。アリストテレスふうにいえば、話し手のエートス（性格）と聞き手のパトス（情念）を相触爆發させていくロゴスとして、ことばをとらえていく精神の行為性がなければ、理論も科學もあつたものではありません。

ここで思い出すのは三木清の「解釈學と修辭學」というすぐれた哲學論文ですが、彼は修辭學を単に言語の問題としてでなく（だから審美主義と分離して）思考の問題として、単なる解釈の論理とし

てでなく、やはり行為的直観の論理として、自己の方法にしようとして決意しています。古代の修辭学は学問というより技術でしかなかった……などというそぶっているひとには、も一度よく読みなおしてもらいたい論文です。ここには、言語をエルゴン(作品)としてよりもエネルギーA(活動)としてとらえようとする哲学者フンボルトの有名な提言の刺激、ないしは影響が濃厚ですが、このフンボルト(一七六七—一八三五)のドイツ人文主義あたりに、かえって初期修辭学のヴァイタルな測面の甦えりが見られるのは興味あることです。たしかにいわゆる言語学者や心理学者や美学者たちは、ことばを既成既存の作品として解釈し、理解し、分析してきました。もっと個人や社会の精神形成の連続的な過程として、活動として、ことばは主体的に実践的にとらえられねばならないわけです。これが必要ならば、いくら文体論が修辭学にかわって柱おいを新たにしよう。杉山氏のいう言語学がそうであるように、文体論もまた「文学の分野において無力」ということになり、吉本氏が「言語の解剖理論が最終目的でなく、たんなるはじまり」というその「はじまり」にさえ、なりえないことは明らかです。

さきに引用したように野間宏氏は「これまでの修辭学は、決して言葉そのものが隣接する領域としての密接な関係をもつ心理、生理、また政治について見とどけることがなく」といいますが、それは私のいう形骸化した「これまでの修辭学」にはあてはまっても、ギリシヤ・ローマの修辭学にはあてはまらないことは、アリストテ

レスの「弁論術」を読んだだけで明らかです。当時のそれは心理、生理、政治そのものでさえあったわけです。そしてペンやタイプこそなかったが、常に「身体を使って作品を書く(ことばを使う)」という行為をば中心に据えて、文学(話術)を考え「ていたわけです。

古代の修辭学は政治家の雄弁術だった、論争術だったと一面的に考えずに、もっと広く、市民誰しもの日常的なことば使いの苦心や知恵でもあったことを考えるべきでしょう。市場での買物やニュース交換(世間ばなし)のときも、修辭学は生きて働いていたわけです。こんにち日本で私たちはおそるべき情報化時代に生きており、不安や危機感におそわれていることを、私も最初に申しました。そんな私たちの日常にとっても、古代の修辭学の役割はひどく暗示的ではないでしょうか。断絶の時代にこそ新しい修辭学(それは文体論でもなんでもかまわないが)の生きた原理が、私たちの手であみ出されねばならないと、私は考えるのです。

私は文体について考え、そのことで文学について思いをめぐらしている人間のひとりとして、以上修辭学について考えてみようとしたのですが、どうもうまくまとまらなかつたようです。ただ、みなさんに抽象的な感じを与えたかもしませんが、私じしんはそのつもりではなく、あくまで足もとの日本の文学の現実を、そして日本語を、具体的に実践的に研究していくための、これは私の身ぢかな反省であって、本質論というよりむしろ私には方法論の一端であることを、おことわりしておきたいと思えます。